

猪郷久義先生のご逝去を悼む

指田勝男



日本古生物学会元会長で日本古生物学会名誉会員の猪郷久義先生（筑波大学名誉教授）は療養中のところ、2019年（令和元年）11月22日に逝去されました。享年87歳でした。謹んでご冥福をお祈りいたします。同じ大学で猪郷先生から一番長く教えを受けた者として追悼の文を書かせて頂きます。

猪郷先生は1932年10月16日に神奈川県川崎市でお生まれになり、小・中学校時代を通して神奈川県で過ごされました。その後1947年に東京都豊島区に移られ、東京都立大泉高校に入学されました。大泉高校卒業後は、1949年に東京教育大学理学部地学科地質学鉱物学専攻に進学され、そこで恩師の藤本治義教授の指導のもと、主に飛騨山地の古生界と産出する古生物について研究をされました。特に飛騨山地福地地域において、下部石炭系から下部ペルム系のほぼ連続した紡錘虫化石層序を明らかにし、一の谷層群にフズリナによる化石帯が設定されました。当時、諸外国にもこの時代の連続したフズリナ化石帯に関する生層序学的研究例はなく、世界的に注目された研究となりました。この研究は学部3年次に行った進級論文でほぼ骨子が出来上がり、藤本治義教授から早急に論文としてまとめるよう、指導があったと猪郷先生からかつてお聞きしました。卒業研究修了後は東京教育大学大学院理学研究科の修士・博士課程に進まれました。猪郷先生はさらに飛騨山地における紡錘虫化石に関する研究を進められ、1960年に“Fusulinids of Nyukawa, their biostratigraphy and paleoecology”と題する学位論文を東

京教育大学に提出され、理学博士の学位を取得されました。学位取得までの数年間に実に20編におよぶフズリナを中心とした学術論文を出版し、若手のフズリナ研究の第一人者として認められました。大学院修了後は1962年、世界的な無脊椎古生物学の教科書でもある *Treaties on Invertebrate Paleontology* の編者の1人として、アメリカ合衆国イリノイ州立大学の准教授として、またイリノイ州立地質調査所の上級研究員として招聘されました。2年間ほどイリノイ州に滞在されましたが、この間に当時のフズリナ化石研究の第一人者であったM. L. Thompson教授の下で、フズリナ化石の研究を続けられました。また一方、コノドント化石の生層序学的研究の重要性をコノドント研究のパイオニアの一人であったJ. W. Collinson博士から指摘されました。アメリカ合衆国から帰国後は東京にある目白女子短期大学の助教授となられ、小池敏夫博士とコノドントの研究に着手されました。お二人のコノドントに関する最初の研究対象は、当時その下部層の年代に混乱のあった新潟県青海石灰岩からコノドントを抽出することでした。幸い、保存のよい上部石炭系の下部を示すコノドントを見出し、その成果は1963年に地質学雑誌に「青海石灰岩からコノドントの発見」と題して、日本における最初のコノドントの研究として発表されました。また詳細な古生物学的記載は日本古生物学会記事・報告“Carboniferous Conodonts from the Omi Limestone, central Japan (Studies of Asiatic conodonts, Part 1)”として出版されています。1964年には日本古生物学会より、それまでのフズリナ、サンゴ、コノドントの研究が評価され、学術賞を授与されました。その後も猪郷先生は小池敏夫博士や学部・大学院学生の協力も得て、石灰岩相だけでなく、当時は秩父古生層として一括されていたチャート相についても研究の対象を広げられました。この研究では秩父古生層とされていたチャート中にも広く三疊系チャートが含まれることを明らかにされました。後の1980年代に放散虫の層序学的知識の蓄積とプレートテクトニクス理論の解釈と相まって「放散虫革命」、「地質学の革命」などと言われた日本の白亜紀以前の地質学に関する革命的な変革の基礎を築いたことは周知の通りであります。猪郷先生は1963年から日本の国策の一環としてはじめられた“コロポ計画”と称される東南アジア各国の地質・古生物学に関する学術的な研究協力組織の古生物研究者の一人として指名されました。猪郷先生はタイ国と半島部マレーシアの研究を主体とし、オルドビス紀～三疊紀のコノドント、ペルム紀有孔虫化石、サンゴ化石を研究され、1964年～1985年まで東京大学出版会から出版された全25巻の *Geology and Paleontology of Southeast Asia* やその他の学術雑誌に多数の論文が出版されました。特に小池敏夫博士とまとめられたマレーシア国ランカビ島におけるオルドビス紀

からシルル紀コノドントの古生物学的研究“Ordovician and Silurian conodonts from the Langkawi Islands, Part1, 2”は当時の下部～中部古生界コノドント化石の研究としては分類学的・層序学的にきわめて優れたもので、東南アジアの同時代のコノドント生層序の基準にもなっていました。またそれまで時代決定に有効な化石の産出記録のなかったタイ、マレーシア国各地からコノドント化石を報告し、現地地域地質の進展に重要な貢献を果たされました。東南アジアの古生物学・地質学に関する研究は現在も筑波大学をはじめ関係する研究者により精力的に進められています。猪郷先生のサンゴに関する研究は、岐阜県福地一の谷層からの石炭紀 *Koninckocarinia* 属の報告に始まります (Igo, H., 1958. On the occurrence of *Koninckocarinia* from the Ichinotani Formation. *Journal of Geology and Geography*, 28, p. 239-246)。サンゴ化石は一の谷層からはフズリナとともに豊富に産し、時代論・国際対比の上できわめて重要な分類群であります。またサンゴは基本的に固着性の生活をおくることから、当時の古生物地理や堆積環境の復元に重要な貢献を果たしています。猪郷先生は福地地域の石炭紀・ペルム紀サンゴ化石について、「飛騨山地南東部の福地地域から産する上部古生界サンゴ化石 (Upper Paleozoic corals from Fukuji, southeastern part of the Hida Massif)」と題して、現在までに Part 7 までのシリーズとして記載・報告されています (Igo, H. and Adachi, S., 2000)。これらのサンゴ化石の研究はきわめて詳細かつ緻密な記載・計測・比較がなされており、同時代の同分類群の国際的指標になっています。また、上部古生界サンゴ化石を飛騨山地以外の関東山地の五日市周辺地域、秩父地域、南牧地域をはじめ、足尾山地、さらにタイ国北東部からも記載・報告されています。猪郷先生の上部古生界サンゴ化石の研究は南部北上山地や黒瀬川地域との対比の上でも貴重な資料を提供しており、また中国や極東地域の国際対比に関しては猪郷先生の研究が日本における標識的な研究報告となっております。このような学術的な研究と並行して、教育活動にも専念され、1966年には目白女子短期大学教授に昇格されました。また、1973年に新しい大学の設立構想、筑波大学の設立に関する準備委員会に助教授として加わり、研究活動とともに大学組織の運営にも積極的・势力的にご尽力されました。1977年には筑波大学地球科学系教授に昇格されました。1981年には当時筑波大学地球科学研究科大学院生であった安達修子氏とともに、飛騨山地吉城層群からオルドビス紀とされるオストラコーダ化石を発見されました。現在の認識では発見された化石からはオルドビス紀とは認定できないとされていますが、それまで日本で最古の化石は南部北上山地や黒瀬川構造体から知られていた下部シルル系のサンゴ化石であったことから、当時としては一大センセーショナルな出来事としてマスコミ等で賑わいました。

猪郷先生は1983年から当時の文部省科研費海外学術研究として北アメリカ大陸太平洋岸のコルデイレラ地域のコノドント、フズリナ化石を主体とした有孔虫化石群、放散虫化石の研究を実施されました。これは当時所謂テレレン解析が北米、日本を中心に行われ始めたのを機に、猪郷先生を含め日本人6名(小池敏夫、猪郷久治、久田健一郎、磯崎行雄各氏と私)とカナダのブリテッシュコロンビア大学や州立地質調査所、アメリカ合衆国地質調査所の研究者が日本とコルデイレラ地域の微化石の対比・検討を行うことを目的として現地調査を行ったものです。また、猪郷先生により1990年から“Biostratigraphical studies of radiolarians and conodonts in chert formation of Thailand and Malaysia”と題する国際共同研究が実施されました。私はこの海外学術研究にも加えて頂きました。タイ国地質調査所、チュラロンコン大学、マレーシア地質調査所、マレーシア国際大学等との共同研究で、これまで不明であった、あるいは単に古生界とされていたチャート相に三畳系チャートも存在し、その他にも中部デボン系～中部三畳系チャートが含まれることが明らかになりました。これは日本における「放散虫革命」、「地質学の革命」と言われた事実がタイ、マレーシア国でも10年後に再び認識されたこととなります。これらの研究は放散虫やコノドントの分類・生層序学的研究にとどまらず、地域地質の解明に大きな貢献を果たしました。更に“消えた海洋パレオテーチス海”の復元等でも大きな力を発揮することになりました。またこの研究で共同研究を行った大学や地質調査所とは現在も良好な協力関係が続いており、若手研究者の学位修得、研究者の交流、共同研究等が積極的に行われています。しかしながら猪郷先生はこの東南アジアの国際学術研究が始まった直後に体調を崩され、暫く東南アジアの研究と大学での研究・教育活動からは離れられました。しかし、手術と休養の後は驚異的な回復をなされ、東南アジアでの国際学術研究にも復帰されました。

猪郷先生は筑波大学を63歳で退職されるまでの約40年間、多くの学生を育てられました。彼らは教育界、実業界等で幅広く活躍されています。また国内の学生だけでなく、中国、インドネシア、韓国、フィリピン、タイ国の留学生も指導され、猪郷先生の下で学位取得後帰国し、自国の大学、研究所の重鎮として活躍されている方々も多くおります。先述の筑波大学の設立に係る準備委員会のメンバーであったことも含め、設立間もない筑波大学で、地球科学研究科長、自然学類長、地球科学系長等の要職を務められ、筑波大学の設立・発展に多大の貢献を果たされました。1996年3月に筑波大学を定年退職され、4月1日付で筑波大学名誉教授にられました。

日本古生物学会では1968年から常務委員になられ、筑波大学ご退職まで委員を続けられました。また、1983年から1992まで日本古生物学会の機関誌である Transactions

and Proceedings of the Palaeontological Society of Japanの編集委員長を務められました。更に1993年～1995年まで、日本古生物学会の会長を務められました。猪郷先生は2002年にこれまでのコノドント、フズリナ化石、サンゴ化石等の学術的研究が評価され、日本古生物学会賞(横山賞)を授与されています。また2003年には日本古生物学会名誉会員となりました。更に長年に及ぶ地質学並びに古生物学の研究・教育に多大な貢献を果たされたことにより、2011年日本地質学会より日本地質学会名誉会員の称号を授与されました。

猪郷先生はNHK教育テレビの高校地学講座の講師としても活躍され、地学教育の普及にご尽力されました。日本学術会議での各種委員、当時の文部省関連の大学設置基準に関する委員会委員や大学入試センターの専門委員、そのほか学術審議会の各種委員を務められました。

筑波大学退職後は国立科学博物館客員研究員として研究を続けられる一方、財団法人自然史科学研究所の所長を務められ、2014年の閉所まで古生物学会関連の書籍の管理や自然史科学に関する教育・研究の発展に尽力されました。2004年からは多摩六都科学館の学芸アドバイザーとして地学関連事業の推進に尽力され、2012年からは組織変更のため特別研究員として2019年6月まで務められました。六都科学館の出版誌「化石News Letter」(のちに「地学News Letter」とタイトルは変わります)には古生物に限らず地球科学に係る様々なトピックスが扱われていますが、猪郷先生は2005年から2019年まで、全部で35編のトピックスを執筆されています。小学生から一般の方が対象ですが、きわめて詳細な記述・説明があり、専門家から見てもその造詣の深さがあらためて注目されています。日頃、最新の出版論文・教科書等にきめ細かく目を通され、ご理解されていたものと思われまします。また執筆記事の多さもさることながら、六都科学館の地学関連のイベントには欠かさず関わっておられました。

猪郷先生は筑波大学在職中に120編を超える出版論文と普及書、解説書、図鑑等の執筆をされました。退職後も国立科学博物館のBulletin of the National Science Museum Series C Geology and Paleontologyにペルム紀サンゴ化石の報告、国立科学博物館専報にサンゴやコノドント化石の記載報告をされ、さらに共同執筆で、ロシア南部プリモリエ地域の下部三畳系コノドント、ベトナム北東部のオレネキアン(下部三畳系)コノドントの詳細な記載学術的研究がNational Museum of Nature and Science Monographとして、それぞれ2009年、2014年に出版されています。学術論文としては筑波大学在職中を含めると140編に達します。その他にも筑波大学退職後も普及書、図鑑等に共著者、編集者、監修者として出版に係っておられます。

猪郷先生は何事にも強い興味を示され、趣味に関して

もその分野の専門家のレベルまで達するような高い見識を持っておられるのが感じられます。カメラ、ナイフ、カエルの置物、釣り竿等の収集を行い、関連する事柄についても研究と同じでとことん極めなければならないという性格がそのまま出ているように思われます。

私事です。私が最初に猪郷先生をお見掛けしたのは東京教育大学の入学試験で当時の理学部W館屋上のプレハブ校舎で先生が試験監督をされていた時でした。背が高く、しっかりと胸を張り、ダンディーでおしゃれな感じでこのような方が大学の先生にもいるのだという驚きの気持ちを持ったことを記憶しております。大学に入学した時にはまだ「立看」があちこちにあり、ヘルメット、角棒を持った学生がうろうろしておりました。猪郷先生はすでに筑波大学に移られ、教育大学には授業のある日のみ、来られていたようでした。当時、筑波大学移転法案に賛成と反対の人たちで地鉦教室は完全に二分されておりました。猪郷先生が教育大学で私共の学年で開講されたのは学部3年次の「地史学」の授業のみで、アメリカ滞在中先生ご自身が興味を持たれたシルル・デボン系の大変詳しいお話をされました。当時はまだ白黒のコピーはなく、独特の香りのする「青焼き」の資料を配布され授業をされました。授業中にはなかったのですが、授業終了後に当時アメリカで撮られたスライド写真を見せていただきました。私の筑波大学での修士論文相当研究では猪郷先生ご指導のもと、岐阜県根尾村周辺の地質とフズリナ、コノドントの研究を行いました。チャートの年代はコノドントを使い検討しましたが酸処理の過程で大変保存の良い放散虫化石が度々出てきました。当時は手許にそのような放散虫の文献資料がありませんでした。猪郷先生にお見せすると、必ず近々に中生界放散虫の研究が始まるから放散虫化石試料を集めておくように言われました。しかしフズリナ薄片の作成と観察のため、放散虫試料の蓄積は進みませんでした。

東京教育大学理学部地質学鉦物学教室には1年おきの秋に開催される「やまぎり会」という同窓会があります。猪郷先生はほぼ毎回出席され、近況についてお話をお伺いするのが私どもの楽しみでした。2016年に開催された同窓会が最後の出席となりました。2018年の「やまぎり会」終了時に配布資料や私の近況を含めてお手紙をお送りした際には、日によってご体調のすぐれない日があり、体調が良いときには多摩六都科学館でお仕事をされている旨のご返事をいただきました。

私は東京教育大学の卒論時から筑波大学一貫制大学院4年次までは学生として、それ以降は教員として猪郷先生ご退職まで21年間お世話になりました。私が助手になってからも、研究・教育はすべて私の自由にさせていただきました。「教育は学生をみて教育しろ、研究は自分が面白いと思ったことを研究しろ」とよく言われました。学生にはいろいろの性格の学生がいる、学生の性格をよく

見てそれに対応するような教育をする。自分の興味・関心の少ない研究をしても絶対に成果は上がらない。至極当たり前のことのようにですが、極めて当を得た指摘です。筑波大学時代あるいはご退職後のコノドント、サンゴ化石の研究はご自身一人か、あるいは他の研究者とされておりましたが、放散虫に関しては主に私と共同研究を行いました。かつて藤本治義先生が設定された関東山地秩父帯の模式地周辺の放散虫による再調査では、調査後の処理で次々にジュラ紀放散虫が産出し、新しい結果が出てくるたびに大変喜んでおられました。秩父帯の層序はこれからどうなるのか、いつも笑顔で我々に尋ねられました。

私はタイ王国国立マヒドール大学カンチャナブリーキャンパスに、短い期間ですが教授として赴任することになり、正式に就労ビザがおり、赴任日程が決まった段階でその旨猪郷先生にお手紙を差し上げました。11月20

日前後には先生宛届くと思っておりましたところ、22日に猪郷先生ご逝去の連絡を受けました。私は次の日に猪郷先生のご自宅にお邪魔し奥様とお話をさせていただきました。私の手紙が猪郷先生宅に届いた時にはすでに意識が無かったとのことでした。ただ出棺前の猪郷先生の枕元に私の手紙をおいて頂いたことで、猪郷先生もお分かり頂いたものと思っております。

猪郷久義先生は研究者として、教育者として私の目標でありました。まだまだ御伺いしたいことが沢山あります。猪郷先生のご逝去は早すぎます。日本の中生代微古生物学の発展に多大な貢献を果たされた猪郷先生を失ったことは極めて残念でなりません。猪郷先生大変お疲れ様でした。有難うございました。どうぞ安らかにお休みください。

合掌

